

## 創作「蒼天時空録」

《はじめに——創作について——》

中国の物語、あるいは歴史と聞いた時、数年前までの私は「三国志」や「西遊記」、「封神演義」の名しか浮かばなかった。内容の方も、そこそこ知っている、という程度だ。「水滸伝」に至っては名前しか知らない。そんな程度の知識しかなかったわけである。

そんな私だが、つい最近になって中国の歴史に興味を持つようになった。きっかけは田中芳樹氏の「繡緞城綺譚」である。その中の登場人物たちのかっこよさは、「三國志」の英雄たちに勝るとも劣らない。中学・高校ともに日本史を専門に学んでいた私は、世界史には疎く、中国の歴史はほとんど知らなかったが、田中氏の作品のおかげで「もっと知りたい」と思うようになった。それからというもの、同氏の「奔流」や「岳飛伝」を読み、多くの名将や名臣たち

### 二階堂 香 里

の物語に触れ、どんどん深みにはまっていった次第である。

今回卒業論文に小説を書かせて頂くことになって、色々と考えた結果、やはり中国ものにしようと決意したのは去年のこと。だが、いざ書くにしても、中国四〇〇〇年という言葉があるように、どの時代も奥が深い。どこをとりあげ、どのような話を書くべきか悩みながらも、すでに決めていたことがある。それは自分のつくったキャラクターと、歴史上の人物を共演させようということだ。実在人物だけを登場させての、歴史小説を書くには、じっくり時間をかけて専門家並に研究する必要がある。だが、今回はそんな時間はないし、自分らしい作品が書けるかどうかも怪しい。そこで中国の歴史を絡めた、オリジナル小説を思いついた。

モデルにさせてもらったのが、田中氏の「創竜伝」二 竜王風雲録」である。この作品は、同氏のつくったキャラクターと、中国

宋代の歴史上の人物、出来事等を絶妙に絡めたチャイニーズ・ファンタジーで、創竜伝シリーズの中でも、私が一番好きな巻だ。舞台は宋の太宗皇帝の時代、ちょうど宋と遼の決戦から始まっている。そこへ天界に住む四海竜王たちが登場し、歴史を陰で操ろうとする邪神と戦うことになる……というのが、大雑把な内容だ。しかし、たまたまオリジナルキャラクターたちが活躍するのではなく、実在人物たちの場面等もしっかり描かれていて、それまで名前しかわからなかった者たちが、血肉を持った存在となっていくのが田中氏のすごいところだと思う。

私は、この作品の中で初めて存在を知った、趙匡胤の息子・徳昭に注目した。彼に対する評価はなかなか辛く、作品中で「あわれみはあるが、それ以上になさけない」と言われている。(どういうことなのかは、ネタをばらしてしまうことになるので、ここでは伏せさせてもらう。) そうなのかもしれないが、私には彼が気の毒に思えてならない。そこで彼に活躍の場を与えてあげよう、と決意。時を少し遡って、宋の初代皇帝である趙匡胤(太祖皇帝)の御代に時代を設定した。さらに詳しく言うならば、開宝八(九七五)年、宋が南唐を攻略した直後から物語は始まる。私のつくったオリジナルキャラクター・蒼天を主人公として。

### 《本編要約》

……地球とは異なる時空に在る世界——神界。そこには地球でいうところの「神仙」にあたる、「天空士」と呼ばれる者たちが存在する。彼らは不老の身体と寿命のない生命を持ち、悪しき諸々の存在と戦う運命を負った者たちである。

ある日、時空が歪み、神界と異界が一時的に繋がる現象「震」が起こり、神界で影をひそめていた邪神・兇工が、異界へと飛んでしまう。そこで神界の長・永代天主は、直弟子である蒼天に邪神討伐令を下した。蒼天の他に親友である朔風と叢雲、そして獅子の姿をした相棒・白天が同行を申し出、彼らは時空を越える決意をする。「異界の名は『地球』——宋の初期、後の太祖皇帝・趙匡胤の御代だ」

蒼天たちがたどりついた異界は、天下統一事業の真つ最中。だがそこには、着々と進む統一の動きを阻もうとする邪神の影があった。古来よりこの国に棲まう妖異・饕餮が、先の戦いで戦死した南唐軍の亡骸と魂魄を操り、凱旋する途中の宋軍を襲撃する。名将・曹彬率いる宋軍は果敢に応戦するも、人ならざる力を持った元南唐軍の前に、次第に追いつめられていく。絶体絶命に立たされた彼ららを、蒼天たちが救う。

「なあ、さっきの妖異、いまから追いかければ、何とかなるんじゃないか」

「いや、あれを斃すよりも先に、するべきことがある」

朔風の提案ももつともであったが、蒼天は元南唐軍たちの魂を救うことを優先する。彼らを眠りにつかせることはできたものの、饜には逃げられてしまうのであった。

饜を逃がしてしまつた一行は、兇工の手がかりも求めつつ、その足どりを追う。途中、行き倒れていた旅の青年・慶貴に出逢う。彼の話から饜の居場所を知つた蒼天たちは、苦戦しながらもそれを斃すことに成功する。

宋の国都・開封にやつてきた蒼天たち。開封は、江南を発した大運河が黄河に接するところ、華北の大平原に位置する都市である。人口一〇〇万といわれる都市に、兇工が潜伏していた場合を思い、やりにくさを覚える蒼天と叢雲。そんな頃、朔風は好奇心から皇宮を見にいづつていた。

「この向こうに皇宮があつて、皇帝つて奴がいるんだな」

朔風の言葉は、全くの独り言であつたが、「そのとおりだ」と応える声があつた。声の主は、まだ若い武将であつた。がつしりとした体格で、身体の大きさだけでいえば、朔風を縦横ともに上回つてゐる。曹彬の五男・曹玘である。

朔風は不審者として糾問されそうになり、その場を逃げ出す。こへ男装の美女を思わせる青年が現れ、斬撃を浴びせてくる。前後を挟まれるかたちとなつた朔風であつたが、少しも慌てなかつた。二人の武将の顔を交互に眺めやり、場違いなほど明るく問う。

「なあ、あんたたちの姓名は？」

「姓は曹、名は玘、字は景休。官は……」

「ああ、官名はいい。どうせ聴いても、わからねえし」

あつさりとした調子で名乗りを遮られ、曹玘はいささか肩すかしをくらつたようであつた。複雑そうな表情で、続くはずであつた言葉を呑み込む。

落日色の双瞳が動き、男装の美女を思わせる青年を映した。

「姓は秦、名は翰、字は仲文」

一見すると「美女」だが、女性ではなく、宦官である。宦官というのは、少年の頃に「淨身」という手術を施され、男性機能をなくした者のことである。ひげがはえず、声も高い。そのため若い女が男装しているようにも見える。

進退窮まつた朔風を、叢雲が迎えにくる。が、疑いは晴れず、仕方なく二人は実力でその場を切り抜けることに。歴史に名を残す勇将たちと、天空士たちは激突する。短くも激しい戦いを中断させたのは、曇天の向こうから迫ってくる悪しき気配であつた。

「どうやら、我々の相手をしている暇は、もうなさそうだぞ。はや自分たちの主の元に行くことだ」

叢雲は謎めいた台詞を残し、朔風とともにその場を去る。事情はわからないながらも、秦翰と曹玘もただならぬ気配を感じとり、皇帝の元へ向かうべく身体を翻した。

二人の天空士が、奇妙な邂逅を果たしている頃、蒼天もまたひとつの出逢いを経験していた。邪神の気の影響で暴れる男を制する若者、現皇帝の息子・趙徳昭、字・日新に、彼とは知らずに出逢う。その名を聴き、驚く暇もなく、飛僵の大群が来襲する。

皇帝・趙匡胤を始め、曹彬や曹玘、秦翰たちが迎撃するも、徒人の力では斃すことができず、犠牲者が続出していく。もうダメだ——誰からともなく、思考が絶望の淵に落とされそうになった時、天空から光の剣が舞い降り、異形の集団の大半を薙ぎ払った。誰もが立ち尽くす中、やってきた蒼天は、宋兵たちがあれほど手こずった飛僵たちを、瞬く間に斃していく。遅れてやってきた朔風と叢雲、そして白天を加えた、神界最強の討伐隊の戦いを、宋軍たちは皇帝を筆頭に呆然と眺めていた。

皇宮襲撃の二日後、旅館に宿泊している蒼天たちを、趙徳昭、秦翰、曹玘の三人が訪ねてくる。彼らは最近開封内を騒がせている怪異解決のため、天空士たちに助力を乞う。悪しきものたちから

人々を護ることは、天空士の本分であり、邪神とまるときり無関係ではなさそうだと睨んだ蒼天たちは、彼らの要請を快く了承する。だが、趙徳昭の頼みは、これだけではなかった。

「どうか、私も皆様と行動をとものにさせて頂けないでしょうか？」  
蒼天は一度はこの頼みを断る。協力したい、と言ってくれたことは嬉しい。だが、だからこそ、首を縦に振れぬことがある。相手は墮ちたりといえども、神。徒人たちがどうにかできる相手でもなければ、挑むなど無謀の極みだ。落命するとわかっていることを、「本人の意志だから」とやらせるわけにはいかない。しかし、朔風と叢雲に現地協力者の必要性や戦力分散の危険性を示唆され、結局は彼らの参戦を認めるのであった。

その夜、趙徳昭は、奇怪な悪夢にうなされて眼を覚ます。旅館の中庭で月見酒を楽しんでいた蒼天に会い、お守りとして勾玉をもらう。二人は酒を酌みかわし、ふと趙徳昭は「神仙方が羨ましい」とこぼすのであった。

飛僵たちがどこからきたのか思案する一同、とりあえず開封の郊外にある陵墓地区に赴くことで話はまとまるものの、蒼天にはひとつの懸念があった。解決策を見出せぬまま、陵墓地区へと向かう蒼天たちであったが、そこを妖異・窮奇に襲撃される。剣を折られ、あわやというところまで追いつめられた趙徳昭を救う一矢。現れた

二人の娘の紹介と、傷の手当てを兼ねて、一行はその日は旅館へと引き返した。

「私の名は翠嵐。このたびはある御方の命により、微力ながらお手伝いをさせて頂きます。よろしくお願いします」

「私の名は雨魅と申します。同じく皆様のお手伝いをさせて頂きます。蒼天様たちほど戦闘は得意ではありませんが、精一杯頑張ります」

この他にモモンガの葵嵐、ハリネズミの氷雨を加え、邪神討伐隊はますますその戦力を拡大させる。そして蒼天の懸念——邪神は通常の武器では斃せないという問題も、彼女たちの参戦によって解消されるのであった。

翌日の深夜、今度こそ陵墓地区へと赴いた邪神討伐隊は、そこで僵尸や飛鷹たちを恐怖で支配する妖異・野狗子と遭遇する。対窮奇戦で剣を折られた趙徳昭には、翠嵐が永代天主から預かつてきた「破邪の剣」が与えられ、秦翰と曹玘の武器には、雨魅によつてそれぞれ破邪退魔の術が施される。そのため、彼らも飛鷹たちを斃せるようになり、戦闘は蒼天たちの優勢で進んでいった。

叢雲の剣が、野狗子の右眼に突き立った時、この戦いは終わったかに見えた。が、一度は倒れたはずの野狗子が立ち上がる。その背にひろがった、巨大な影を見、蒼天は金色の双眸を見開いた。

「兇工——!？」

現れた兇工は、趙徳昭に自分の配下になるよう、彼の心に直接誘いかけてくる。その声はいつかの悪夢で聴いたものと同じであった。邪神の誘惑をはねのけ続ける趙徳昭であったが、ある言葉を聴いた途端、その心に初めてすぎができる。それに気づいた蒼天が、彼を正気づかせるが、激怒した兇工によつて皆手傷を負わされてしまう。大切な仲間たちを傷つけられたことで、蒼天の怒りが爆発し、邪神の影は野狗子の身体もろとも消し飛ばされた。ほとんどの者が瞬くことも忘れて、神界最強の天空士の背を見つめる中、趙徳昭の耳だけに兇工の声が聞こえた。

『では——解放してやろう。運命から、皇族から』

甘く恐ろしい考えが、心に浮かんで、弾けて消えてゆく。蒼天を始め、仲間たちが様子のおかしい彼を気遣う。が、趙徳昭には、そんな彼らの顔すら見られない。

——何を、言われた。そう問いかけたいのを、蒼天は何とか堪えていた。いまの彼では、おそらくその問いに答えられないことがわかっていて、何かに必死で耐えている姿は、あまりにも脆く、儚かった。旅館に戻った後も、趙徳昭は何も語ろうとはしなかった。事情はわからないまでも、彼が何か悩んでいることは明白であったから、皆彼を気遣う。が、趙徳昭には仲間たちの気遣いですら、重く感じ

られてならない。居心地の悪さを感じた彼は、蒼天のことを話題に振り、その過去を知る。蒼天がとある国の王子であつたこと。彼が一五歳の時に国は滅び、両親を目の前で惨殺されたこと。それをきっかけとして、天空士としての能力に目覚めたこと……あれほど気性の穏やかな青年の、秘められた過去に、趙徳昭たちは言葉を失つた。と、男装の美女を思わせる青年が身動きした。

「……申し訳ない。私は……正直な話、神仙というものは、悩みや苦しみなどは、無縁のものだと思つていた」

奇妙な面持ちの秦翰の横で、曹圮も頷いてみせた。神仙とは、俗世間を離れて、自由気ままに暮らす者たち——そう思つていた。不老の肉体を持ち、悩みや苦しみも忘れて、幸福に生きているのだと。

雨魅あまみのいれた茶を受けとり、蒼天はほろ苦い表情をつくる。

「神仙といつても、私たちだつて人の子さ。何者に生まれようとも、何者になろうとも、約束された幸せなんてないんだよ」

その気持ちは、いまの趙徳昭にはよくわかつた。自分は皇族として生まれた。庶民からすれば、衣食住の全てが保障され、恵まれてるように見えるだろう。だがそれでも、「お前は幸せか」と訊かれた時、首を縦に振ることはできない。

小麦色の髪に青の瞳を持つ青年が、新たに注がれた茶の湯気を額に受けて言う。

「——命の時間の長さ、おかれた状況に限らず、辛いこと、苦しいことは多々ある。結局は——その者の心次第なんだろう」

たとえ他者の目にどう映ろうとも、何が幸せで、何が不幸かを決めるのは自分自身である。心のありかたひとつで、人は幸せにも不幸にもなれる。そういうものではないだろうか。

ふと叢雲が湯気の向こうを透かし見れば、秦翰の双眸とぶつかった。若き勇将は、口元に苦みをたたえたようである。

「心のありかた……確かにそうかもしれない。だが、それは、案外簡単で、案外難しいもの……そんな気がする」

人という生き物は、どうしても目の前で起こっていること、目に映るものを優先しがちになってしまう。頭でわかっていることよりも、現実の方が心を支配するのだ。

朔風の茶碗に新たな茶を注ぎつつ、雨魅はひとつ頷いてみせる。

「そうね。心のありようだと思つていても、現実辛いことがあつたら、人はそれしか見られなくなる……そんなものよね」

何となく水色の瞳を動かせば、翠嵐すいりんが首を縦に振るのが見えた。

「辛いことや苦しいことが続くと、自分は何てかわいそうなんだろう、何て不幸なんだろう、つて深みにはまつてしまふのよね。そうになると、なかなか抜け出せなくなつて、それを別のもの——生まれとか、環境とかのせいにしちゃう。そんなことしたつて、何の解決

にもならないのに……」

翠の瞳の娘の口調は、少なからずの苦みを含んでいる。ひよつとしたら、自身が口にしたとおりの経験があるのかもしれない。とはいえ、彼女は、現実をおさえることの重要さまで否定しているわけではない。辛いからといって現実から目をそらしても、出口はみつからない。かといって、それだけ見ている、やはり出口はみつからないだろう。

「俺にも身に覚えがある。いやはや、皆、同じところにはまり込むものなんだな」

曹祀の言葉に、蒼天は茶の表面に視線を落としそのまま言葉を紡ぐ。

「神仙だから、幸福なんじゃない。徒人だから、不幸なんじゃない。どんな命も、幸せと不幸の両方を半分ずつ抱えて、生きていかなきゃいけないんだ」

そこで語を区切り、夜闇に輝く月を思わせる金色の双眸で、皆の面上を一撫でする。

「景休の言うとおり、同じなんだよ、神仙も、徒人も。——何もかわらない」

——幸せになりたい。誰でも一度は願う、言葉にすれば、こんなにも短い想い。だがそれは誰もがなかなかたどりつけない、一番遠くて近しい、人生の終着点ではないだろうか。

「——難しい、ですわね……」

幸せになるということは——。何かを悟つたような笑みをたたえ、趙徳昭が呟いた。

金色の双眸を持つ親友と微笑をかわし、朔風が口を開いた。

「完全な正解もなければ、命の数だけ答えがあるだけに、余計にな。まあ、何にせよ、いま在る自分を精一杯生きるしかない、つてことだ」

彼の明るい表情につられてか、他の者たちの間にも笑顔がこぼれる。趙徳昭は、自分が追い求めたものの正体が、いまようやくわかった気がした。

邪神が開封にひそんでいると睨んだ蒼天は、趙徳昭たちに頼んで行方不明者の有無を調べてもらう。すると多くの人々が忽然と姿を消していることや、夜に化け物を見たという目撃情報が寄せられていることがわかる。他に手がかりのない一回は、三手に別れて開封の街へと繰り出す。そこで蒼天と趙徳昭、そして白天は、以前助けた旅の青年・慶貴と思わぬ再会を果たし、「人が影に喰われる」という話を聴くのであった。

実際に、数人の男が、自身の影から伸びた触手に捕らわれ、その中へと引きずり込まれる場面に遭遇した時、蒼天はようやく兇工の居場所に気づく。邪神たちは開封の下、正確には、開封の裏側に巨

大な空間をつくりあげ、ひそんでいたのだ。そして地に伸びる影を媒介として、こちらの世に干渉するための道をつくり、人々を自分たちのつくった空間へと引きずり込む――。

場所さえわかれば、蒼天の力で空間を繋げることができる。人と邪神が、雌雄を決する時がきたのだ。邪神のつくりあげた空間に乗り込んだ蒼天たちを、一〇〇を超える妖異と兇工が出迎える。そこで兇工は、再び趙徳昭に配下になるよう誘いをかけてくる。それに応じれば、運命から、皇族から解放し、神仙にしてやると。が、彼はその誘いを断る。

「私は……神仙になりたかつたんじゃない。蒼天殿たちのように、強くなりたかつたんだ――」

皇族として生まれたことは、自分にとつては、押しつけられた運命でしかなかった。表面的には豪華で、その実体はただ冷たいだけの運命――それを、見えない何者かに押しつけられたのだ、と。

「満たされない心を、運命のせいにしたって何もかわらない。そんなのは甘えでしかなかったんだ。自分をかわいそうだと、不幸だと思うことは、誰にだつてできる」

だが、蒼天たちは違つた。自分を不幸だと甘やかしてはいない。神仙という立場に、溺れてもいない。運命を押しつけられたと考えるのではなく、それを切り開いていくことを考えている。

「私は――自分を憐れむ心と、それと戦えるだけの強さが、ほしかっただけなんだ！」

それは、自分で手に入れるしかないものだ。他者から与えられるものではない。周りの者は手助けぐらいはできる。支えることもできるだろう。だが、最終的に自分の心と戦えるのは、自分しかないのである。

「これが――私の答えだ」

趙徳昭を傀儡かいらいにすることに失敗した兇工は、今度は蒼天の方へ誘いをかけてきた。彼が人間に対して、少なからず失望している点を見抜き、人間を滅ぼして理想の世を築こうと。

「……確かに、人間が愚かに見える時がある。それは事実だ。否定はしない」

人間はいつの時代も、互いに殺しあっている。傲慢で身勝手、目先の欲に惑わされて平気で他者を踏みにじることができる。それを、自分は何度も見えてきた――。

「だが、それでも――私は知っているつもりだ。人間の中にも、信じられるものがあることを。愚かだからこそ崇高でありたいと望み、必死で生きている人間がいることを。そんな生命を、私たちは――私は護る!!」

交渉は決裂し、決戦の火蓋がきつておとされる。激戦を繰り返す



ける天空士と人と神獸しんじゅう。そして妖異よういたち。形勢不利を悟った兇工は開封の外へと逃げ出し、それを蒼天と趙徳昭が白天に乗って追跡する。途中、趙徳昭は邪神を斃ころした後、蒼天たちはどうするのかを尋ね、彼らが異世界の住人だと知っていたことを告白する。しかし、蒼天も知られていたことに気づいており、その上で黙っていたことを謝罪するのであった。

赤壁せきへき上空で、邪神の足をとめることに成功する蒼天たち。長江へと落下した兇工は、ついに本性——双頭の龍——を現す。蒼天は天空士の名の由来ともいうべき、飛翔術ひしょうじゆつを駆使し、趙徳昭は白天の力を借りて兇工との最終決戦に臨む。

「蒼空魔刹斬!!」

神速しんそくを誇る蒼き刃が、長大な首を薙いだ。半ば以上斬り裂かれ、どす黒い血流が長江へと滝のように流れ落ちる。自身の頭の重さに引きずられるように、兇工は首をのけぞらせた。だが、それでも両眼から意志の光は消えない。重い頭を苦勞して持ち上げ——暗赤あんせき色の両眼は、掲げられる銀色の剣身を映した。

「兇工!!」

蒼天はありつたけの力を込めて、愛劍——『蒼萊そうらい』を突き下ろし

た。蒼と銀の煌めきをおびた雷光が、兇工の額に落ちる。それは以前蒼天自身が負わせた額の裂傷の痕と、全く同じ場所であった。恐ろしいほどの絶叫がほとばしる。

隻眼となつた龍首りゅうしゆが、金色の双眸を持つ天空士に迫る。

「させるかっ!!」

趙徳昭は白天の背を蹴つて、宙に身を預けた。左肩の傷が痛むのも構わず、剣を両の手で逆手に持つ。天空からこぼれる灯りを受け、剣そのものが光の塊となつて銀色に輝く。破邪はじの剣が、兇工のもうひとつの頭に真上から突き刺さつた。

——兇工は絶叫した。ほとんど断末魔だんまごの叫びだ。もはや最後の抵抗といつてもいい、荒れ狂う気が、蒼天と趙徳昭を容赦なく打ちのめす。

内腑ないふをえぐられるような苦痛が駆けめぐり、口の中に錆びた鉄の味がひろがった。左肩の痛みが増し、趙徳昭はあやうく意識を手放しそうになる。遠のきかけた意識の底で、彼は蒼天の声を聴いた。

「——私が願ひ……!!」

——いざとなつたら、紡ぐといい。

四肢を打ち碎かれるような激痛が、蒼天を責め苛む。だが、それ

でも彼は『蒼天』を握る手だけは、決して緩めようとはしなかった。喉の奥からせり上がりつてきた熱いものを吐き出しながら、神呪を紡ぎ続ける。

「我が剣に託し、命ずる——!!」

いつしか、神界の天空士と地球の貴公子の声が重なっていた。

——必要なのは意志であり、心だ。

願いを、祈りを、想いを——その全てをのせ、二人は叫ぶ。

『邪氣封滅——!!』

兇工の身体の内側から、白光の輝きがあふれ、爆発する。凄まじい爆風をもろにくらい、蒼天と趙徳昭の意識は、灼熱の激流の中に呑み込まれていった……。

蒼天が目覚めると、周囲には仲間たちの姿があった。心配していた趙徳昭や白天も無事であったことに、胸を撫で下ろす。皆揃って迎えた曉降ち……戦いが、長い長い夜が——本当の意味で、終わったような気がした……。

使命を果たした天空士たちは、三日間ほどを開封見物をして過ぐす。夢のような時間は瞬間に過ぎ去り、やがて別離の時を迎える。それぞれのやり方で惜別の思いを表す一同。蒼天と趙徳昭は、空を、

時を越えて、いつの日か再会することを誓い合う。様々な想いを胸に、天空士たちはあるべき世界——神界へと帰還するのであった。

——邪神・兇工を討つてから、神界では数ヶ月の時が流れた。『震』によつてもたらされた歴史書で、蒼天たちは秦翰や曹玘の生涯を、そして趙徳昭の非業の死を知る。それからさらに月日は流れ、一年ほど経つたある日、旅人を苦しめる悪鬼討伐に赴いた蒼天に、声をかける者がいた。

「あの、天空士様」

その声に、蒼天は自身の耳を疑った。

——正気づきなさい。自分が何をしているのか、わかっているのですか!?

すつきりと整った顔だちに、瞳には聡明そうな光をたたえて。初めて見た時は、『貴公子風』の青年だと思つた。

振り返つた先に、ひとりの青年がいた。長い旅の途中らしく、外套の各所が埃にまみれている。外見の年齢は、蒼天よりも若干下のようなだ。

「先ほどのお手並み、感服いたしました」

青年が微笑みかけてくる。

瞬くことも忘れて、彼を凝視する蒼天であつたが、脳裏を駆けるのは全く別の情景だ。

——いいえ、必ず逢えると、私は信じています。

それに対して、自分は「必ずまた逢おう」と言つた——。

「もしよろしければ、天空士様、ご尊名を教えて頂けませんか？」  
青年の胸元で、青い小さな勾玉が光る。

時を越えて。

空を越えて。

いつか、いつか——。

金色の双眸を持つ天空士は、穏やかに微笑んだ。

「私は蒼天。この子が白天だ」

——また……逢えたな——。

時と空を隔てて存在する、数多の世界——。

そのうちのひとつ、神界の空は、今日も蒼く晴れわたっている……。

### 《あとがき》

本編は原稿用紙にして、約六〇〇枚におよぶのだが、掲載にあたり約二〇分の一におさめた。そのため、わかりにくい部分が多々あると思うが、何卒ご容赦願いたい。

この『蒼天時空録』は、私にとつては色々な面で「挑戦」であつた。まずオリジナルキャラクターと、実在の人物を共演させるという点。中国を舞台とする点。歴史に少なからず介入する点……「挑戦」が多かつただけに、苦勞した部分もたくさんある。

中国史は奥が深く、調べても調べても満足できなかった。限られた時間の中で、出来る限り調べたつもりだが、間違っている部分、不完全な部分があると思う。もう少し時間があればよかつた、という気もするが、たとえどれほどの猶予が与えられたとしても、満足はできなかつただろうとも思う。

蒼天たちオリジナルキャラクターが生まれたのは、もういまから

——蒼天時空録・完——

五年ほど前のことになる。記憶の底に眠っていた彼らを起こし、目の前に全く新しい世界を示せば、全員実生き生きと走り回ってくれた。彼らがいってくれたおかげで、実在人物である趙徳昭たちのキャラクターを立たせることができ、彼らが「歴史に埋もれた過去の者」ではなく、血肉を持った存在となってくれたように思う。神界から五人と三匹、地球から三人と主要登場人物が多く、少々大変であったが、みんなでわいわいと騒いだ第七章の前半部分などは、特に楽しかった。

趙徳昭は、本編中にもあるとおり、最後は自殺することで人生に幕を下ろしている。断定はできないが、二三歳くらいだったようだ。いまの私が二二歳であるから、わずか一歳しか違わない。あまりにも哀しい最期だったので、彼に活躍の場を与えてみたのだが、そのかわり色々と苦勞をさせてしまったので、申し訳ない気もする。実在した趙徳昭が、皇族であることに、本当にコンプレックスを抱いていたかどうかはわからない。あくまで私の中の「趙徳昭」の話である。だが、生まれながらにして、他者とは違う部分を持っていた以上、他者とは違う痛みを感じるがあったのではないだろうか。書くにあたって、一番悩んだのが第八章である。漠然と感じていることを言葉にするために、親友にも助力を願ひ、一晚中「幸せ」について語り明かしたこともある。こんな私のために徹夜までして

くれた親友には、いまこの場をかりてお礼を言いたい。本当にありがとう。

第八章に書かれたことは、そのまま私たちの想いだ。正しい、間違っているではなく、「幸せ」というものについて考えることで、少しだけ心が大人なれたような気もする。人が幸せになるのは、案外簡単で、案外難しい。朔風の言った、「いま在る自分を精一杯生きる」ためには、趙徳昭の出した「答え」が必要になる。情けないことだが、いまの私にはそれはない。そういう意味では、私の中の「趙徳昭」は、私の心を反映した青年だったといえる。

非業の最期を遂げた趙徳昭は、本編の最後で神界の方へ転生している。そんな馬鹿な、と思われるだろうが、私は「趙徳昭は自殺した」で終わらせたくはなかつたのである。哀しい最期だったからこそ、何らかのかたちで救いがほしかった。そこで考えたのが、転生である。彼は以前の記憶は全て失っているが、きつとその魂が、蒼天たちのことを憶えているはずだ。蒼天たちと一緒に、新しい人生を幸せに生きてくれることを、私は願わずにはいられない。

この『蒼天時空録』を書くことができて、本当によかったと思う。蒼天たちにまた出逢えて、趙徳昭たちに出逢えて、本当によかった。

最後に——ここまで読んで下さって、ありがとうございました。